



新たな年を迎えました。本年もどうぞよろしくお願いたします。

《住まい塾》高橋代表が毎週月曜日に更新しているブログ ~信州八ヶ岳~高橋修一の「山中日誌」が昨年末に連載 400 回目を迎えました。八ヶ岳の自然から最近の世相まで、様々な内容で 2015 年以来長く続けてきました。

今号は、自然の営みの美しさからの気づき、代表のブログ執筆に対する想い、設計者が問われるべき品格についてのコラムを抜粋してお届けします。特に私達にとっては、設計における大切なことや仕事に対する姿勢を再認識する場になっています。

住まい手の皆さん、施工者の皆さん、日頃このブログに馴染みのない方にもこの機会にお読みいただけましたら嬉しいです。 住まい塾だより編集委員



~信州八ヶ岳~  
高橋修一の  
「山中日誌」

コラム 119 ( 2017 年 12 月 11 日 )

### <棲まいに美を求めるのは、人間ばかりとっていたが>

よく見れば、野鳥の巣にも昆虫の巣にもそれぞれにある種の美が宿っている。作るにも暮らすにもぐちゃぐちゃなんてことはない。

以前雑誌に“棲むことにおいて美を求めるのは、人間に与えられた摂理であるかもしれない、などと書いたが、これは違っていた。

野鳥達の巣は美しいではないか、

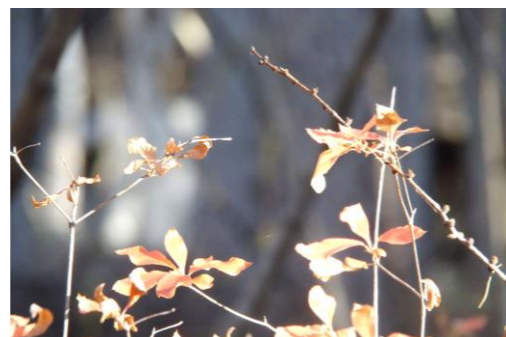
昆虫達の巣づくりもそれぞれに美しいではないか、

これらは明らかに与えられた摂理と呼ぶべきものである。

一本の苗木を植える。少々形が悪くとも、光を求め光合成を繰り返しながら次第に形を整えてゆく。これとても自然の摂理と呼ぶ外ないだろう。動物、植物の姿形・色彩も美の摂理の範疇にある。

ハッと気付かされた。

人間は限り無く崇高な美を求めて已まない存在だが、しかしこれ程ぐちゃぐちゃの中で平気で暮らせるのも、人間だけではないか……と。



コラム 257 ( 2022 年 2 月 21 日 )

### <私のブログ——『マンデー毎日』>

短文ながら毎週月曜日に書き続けている私のブログ(コラム)は、これまで縁のあった人々に向けてばかりではなく私から今の世間に向けてのメッセージでもある。これはある意味で我が身を削りながらの作業であると思うのは、これに熱中して書いている間だけ、不思議にもこの病の苦しみを忘れられるからである。

私の理想としてきたことのどれ程が数十年歩みを共にしてきた仲間達に理解され、伝わってきたか、私には判らない。そうした問いに対してブッダは初期仏典のひとつである『ダンマパダ』(漢訳では『法句経』)の中で

“それは偏(ひとえ)に弟子自身の問題であり、私にはどうすることもできない。私はただ道を説くだけである、

と語っている。それに較べれば私のこれまで述べ、書き記してきたことなど、大した内容のものではないと自覚しているが、中には普遍的な事柄も含まれているから、折角長い間歩みを共にしてきたのだ。それだけでも伝わってほしいものだ。

しかしそれは私の望み、希望であって、結局は上記の言葉に託さざるを得ないのです。



コラム 355 ( 2024 年 1 月 8 日 )

### <白井晟一の言葉① — 建築表現の中で最も難しいのは何か? >

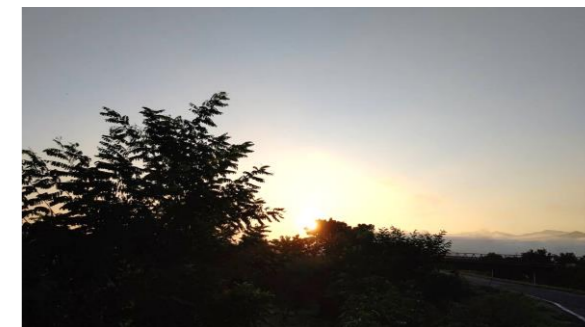
研究所に居た 10 年間のうち後半は、私は白井晟一の自宅「虚白庵」に付属するアトリエに移ったから、白井晟一や照子夫人と直接話す機会が自然に増えた。その中で思い出に残っているいくつかをここに記しておこうと思う。

ある日、リビングルームの大きなテーブルに座っていた時、白井晟一が私にこう聞かれた。

“建築表現の中で最も難しいのは何だと思うか?、

私はすぐに返答できなくて黙していたら

“品だよ、品(品格と言われたかもしれない)、



この言葉を私は生涯忘れない。確かに白井晟一と他の建築家達の設計との際立った違いは、この品格にあると思えたからである。

それは建築表現について語られたものだったが、人間だって人格、風貌(ぼう)、風格等さまざまに表現するが、その中で最も出にくく、努力しても出ないものは、品、品性、品格といったものである。なぜならそれらは一人の人間の中でさまざまな要素が総合されて浸み出てくるものだからである。その場に及んで力んで見ても、努力してみても、こればかりは出せるものではない。

建築家なのだから美的感覚を磨くことも大事だが、品性となると、人間の精神を磨いてそれにふさわしい人間になる以外方法はないのである。品格のない人間が品格のある空間を生み出すなどということは絶対と断言していい程無い、と私は思う。

以来白井晟一が言われた言葉の中で、これは最も忘れ難い言葉のひとつとなった。